

前田氏（長種系）屋敷跡より出土した貝類遺存体の研究

畠山 智史・安中 哲徳

1. はじめに

前田氏（長種系）屋敷跡は、石川県金沢市大手町地内の大手堀北側に所在する。発掘は、国家公務員共済組合連合会金沢共済会館の改築を原因とし、1996（平成8）年7月8日から同年11月8日に実施された。その成果は、石川県教育委員会・（財）石川県埋蔵文化財センターより、2002年に報告されている。

既報（安中・栃木2002）によると、2面の遺構面（1020m²）が確認され、下面（320m²）より、縄文時代中期の落し穴1基や弥生時代の墓地、古代の土坑や溝など、それらに帰属する土器や石器などが検出・出土している。今回報告する分析資料は、上面（700m²）より出土した貝殻や魚骨、獣骨を含む動物遺存体であり、それぞれ近世前葉（町屋期）、前田氏屋敷期、近代以降（大手町小学校他期）の3時期に帰属する。

本屋敷跡は、前田長種（1550（天文19）～1631（寛永8）年）を祖とする加賀藩の老臣前田氏が1639（寛永16）年から1871（明治4）年まで8代にわたり構えた武家屋敷である。前田家（長種系）は、加賀藩の大名家老である加賀八家の一つである。遺跡より出土した資料は武家の生活における食物残滓を含み、これまで文献資料で議論されていた加賀藩の食文化をより具体的に明らかに出来る可能性がある。そこで近世食文化の復元を目的に、貝類遺存体についての分析を実施し、実証的な情報の提示をしたい。

2. 資料と方法

資料は、1996年の発掘調査により得られた前田氏（長種系）屋敷跡出土の貝類遺存体である。出土した遺構は、近世前葉（町屋期）～前田氏屋敷跡期に帰属するSK30、SX05、SK27、SK02、SE08である。また近代以降の整地土（0層）からも資料が得られている。遺構の概要と主な遺物は、以下の通りある。

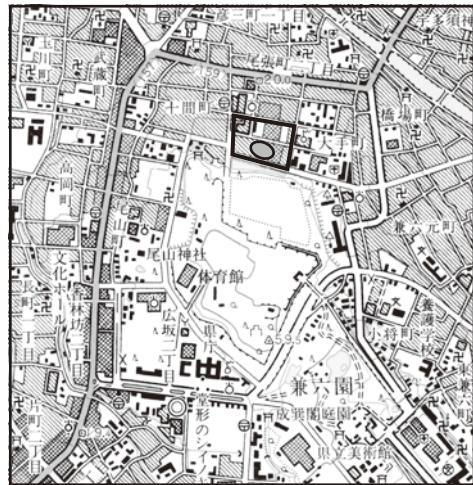
SK02 前田氏屋敷（1639-1871）期に帰属する不整形な土坑であり、土師器皿や瓦、轆羽口、鋌、鉄滓などの多数な遺物が出土した廃棄土坑である。1857（安政4）年調整の「前田美作守御上屋敷絵図」では建物の位置に重複することから、絵図に描かれた屋敷の改修前後の遺構（廃棄が近代に下る可能性もある）とみられる。

SK27 近世前葉（屋敷地7新）に帰属する略円形の土坑であり、屋敷地中央に位置する。土師器、磁器、碗が出土しており、廃棄土坑と推定される。

SK30 近世前葉（屋敷地7新）に帰属する略円形の土坑であり、SK27に切られる。屋敷地中央に位置する。土師器や磁器の他に刀装具や鉄滓などの多数の遺物が出土した廃棄土坑である。

SX05 近世前葉（屋敷地7古）に帰属する長さ約5.2m、幅約2mの内部に約1.4×1.2m、深さ約2mの方形土坑が掘られた地下室と推定され、屋敷地中央（東？）に位置する。土師器皿や陶磁器碗・皿、織部黒釉茶碗、焼塩壺、硯、碁石、煙管、小柄、漆器などの多種な遺物が出土している。

SE08 近世前葉（屋敷地1新）に帰属する素掘り井戸であり、屋敷地南西隅に位置する。実測可



遺跡の位置 (S=1/25,000)
(アミカケ部分は、調査地点)

能な土器・磁器等得られていない。

種の同定には、肉眼およびルーペを用いて、報告者所有の現生貝殻資料や図鑑との比較検討を行った。同定した資料は、種・部位ごとに番号を付記し、収納した。同定出来た資料を計数し、出土遺存体の定量化を図り、客観的なデータの提示に努めた。結果は、動物遺存体属性表（1・2）に記した。

3. 結果

54点の貝類遺存体について、10種が同定できた。以下に種名を示す。これらの貝種は食用であり、現在でも県内において採集可能である。次にこれらの生態的特徴や実見によって得られた所見を示す。

① アワビ類（ミミガイ科） *Haliotidae*

破片であるため、種の同定には至らなかった。アワビは他の貝種に比べ、嗜好性が高く、現在も比較的高価であることからも庶民的な食物残滓ではなく、ある程度の身分階層の高さが想像される。

京都の近世遺跡でのアワビ類の出土状況をみると、公家屋敷跡である二條家屋敷跡 S 14 や武家屋敷跡である平安京左京四条二坊十四町跡 SK2053 で確認されるものの、町屋跡である平安京左京六条三坊五町跡 SX170 では出土していない（丸山 2013）。東京大学構内遺跡においては、大型のサザエやアカガイとともに出土しており、「ハレの場」での利用が想定されている（追川 2004）。アワビ類の存在は、当時の身分階層を示すのかもしれない。

② サザエ *Turbo (Batillus) cornutus*

各時期より出土しているが、近世前葉からの出土が最も多い。全て殻軸のみであり、蓋が未確認であることから、別途の利用などから廃棄場所が異なる可能性が示唆される。サイズ的には小型であり、目立った受熱痕等はないことから、煮炊きによる利用が考えられる。サザエは、外洋岩礁性の貝種であり、石川県内では現在も一般的である。周年的に採集可能な貝種であるが、旬は夏とされる。

③ バイ *Babylonia japonica*

遺構上面及び SK02 東側より 1 点ずつ出土した。ベーゴマの素材としての利用（池田 2011）もあり得るが、完形や前位一部欠損であるため、食物残滓であろう。目立った受熱痕等はないことから、煮炊きによる利用が考えられる。その採集方法は、素手による直接採集、もしくは肉食性の貝種であることから、バイ籠漁が推定される。

④ アカニシ *Rapana venosa*

その採集方法は、素手による直接採集、もしくは肉食性の貝種であることから、バイ籠漁が推定される。現在、七尾湾周辺で「あかにし」と呼称され、市場に流通しているのは「コナガニシ」であり、今回同定した「アカニシ」とは異なる。

⑤ マガキ *Crassostrea gigas*

近代以降の井戸掘方より 1 点出土した。イワガキが多い本遺跡では、近世以前のマガキは未確認であるため、採食の時期差を反映しているのかもしれない。貝毒があり、採食時季は限定され、主に冬季から春先であろう。

⑥ イワガキ *Crassostrea nippona*

各時期より出土している。目立った受熱痕は、確認できなかったことから、煮炊きや蒸し、生食の可能性が示唆される。マガキとは異なり、旬は夏季であり、当該季節に採食したと思われる。

⑦ フネガイ科 *Arcidae*

破片であり、種の同定には至らなかった。少なくとも肋数が 11 本以上計数できたことから、アカガイやサルボウガイなどが推定される。

⑧ ヤマトシジミ *Corbicula japonica*

本種の生息域である汽水域環境が工事による悪化や消失のため、石川県レッドリストでは情報不足

のカテゴリに区分されている。県内の分布は、柴山潟、河北潟、邑知潟、奥原潟とされているが、現状は不明とされる。近世の記録によると、蜆貝漁を巡る八田村と五郎島の漁民間での争論（金沢市史編纂委員会 2003）があったようで、当時の資源としての重要性の高さが想像される。

⑨ ハマグリ *Meretrix lusoria*

現在、市場に流通している石川県産蛤は、主に外洋性のチョウセンハマグリであり、近世までハマグリが県内に生息していたことは、生物学的にも興味深い事例である。

近世では 1836 (天保七) 年の『外海獵業卸役立之分并網・船・魚等品数記帳』によると、ハマグリは「蛤」と記載され、正月～4月頃（旧暦）が漁期とされている。また 1858 (安政五) 年、3月、4月に加賀藩が江戸近海の小蛤を取り寄せ、白尾村から木津外海へ掛けて、放流した記録がある（金沢市史編纂委員会 2003）。

No.38 は、殻表に強い障害輪が観察できた。障害輪は、その個体が受けた刺激に対する応答であり、例えば津波や洪水などに被災したときに生じる。このハマグリが帰属する時期は、屋敷跡（1639-1871）であり、1799 年に生じた金沢地震との関連も興味深い点である。近年では東北沖地震を原因とする津波に被災したアサリの障害輪（災害輪）が報告されている。実際に津波なのか、洪水なのか、その要因を明らかにすることは現時点では難しいが、保存が良好であり、成長線分析を実施することでその障害輪を生じた月日（季節）の推定が可能である。

⑩ チョウセンハマグリ *Meretrix lamarckii*

石川県内では、縄文時代中期の上山田貝塚における主な構成種でもある。現在も「はまぐり」の呼称で、市場に流通している。

⑪ コタマガイ *Gomphina melanegis*

石川県内では、「あさり」や「あおさがい」の呼称で、現在も市場に流通している。この種は、内湾砂泥底に生息するアサリなどに比べると、より外洋に近い砂底に生息する種であり、現在も内灘周辺で採集できる。近世では 1836 (天保七) 年の『外海獵業卸役立之分并網・船・魚等品数記帳』によると、コタマガイは「沖あさり」と記載され、「蛤」と同様に正月～4月頃（旧暦）が漁期とされている（金沢市史編纂委員会 2003）。

4. 考察—近世・近代、金沢における貝類利用の変遷—

a. 近世前葉（町屋期）－SK27、SK30、SX05、SE08－

二枚貝は、ハマグリ類の破片、巻貝は、サザエ、アカニシが確認できた。小型のサザエが多く、また全て殻軸のみが出土しており、完形がない。小型の個体であることから、刺身などの生食には不適と思われ、煮炊きや焼きによって、調理したのであろう。硬質な蓋は、未確認であることから、廃棄場所が異なるのか、もしくは別途の利用が示唆される。

b. 前田氏屋敷期－SK02（東側）－

二枚貝は、コタマガイ、フネガイ科（アカガイ？）、チョウセンハマグリ、ハマグリ、ヤマトシジミ、不明（イガイ？）、巻貝はアワビ類、サザエ、バイが確認できた。本屋敷跡において最も種が多い時期である。

最も多く出土したコタマガイ 9 点の内 4 点については、殻体後位の欠損が特徴的であり、採食時の意図的な破損が窺われる。しかしながら、二枚貝であるため、ある程度の熱量を加えれば貝殻が自ずと開き、容易に可食できる。生食の為に、こじ開けたと考えることも出来るが、コタマガイの生食利用は、現在では一般的ではなく、また加賀藩料理人の舟木伝内の料理書関連（大友ほか編、2006）にも記載がないことから当時も同様とされる。この事例は民族例等を検証し、破損について、今後明ら

かにしたい。

アワビ類は、破片であるため種は未同定である。県内では、他に金沢城跡本丸附段より出土している（黒澤、2008）。東京大学構内遺跡の加賀藩屋敷跡でも、アワビ類やアカガイやサザエ等の大型貝類が出土しており、華やかな「ハレの場」での利用が想定されている（及川2003）。

この“ハレの場”的季節は、いつであったのか。その問い合わせに答える情報は、貝殻資料に残されている。上記の通り、ハマグリやコタマガイの漁期は、1836（天保七）年の『外海漁業卸役立之分并網・船・魚等品数記帳』によると、旧暦の正月—4月頃（金沢市史編纂委員会2003）とされ、出土した遺構への廃棄季節も当該期間と考えられる。同文献資料によると、「螺」の記載があり、4・5月頃（旧暦）が漁期とされている。この「螺」は、「榮螺」や「赤螺」などが想定される。

他の貝種の漁期が不明であるが、その利用季節は、その旬や季語から知り得ることはできる。それぞれの貝種の季節は、ヤマトシジミ、サザエが夏季（6—8月）である。ハマグリやコタマガイの漁期である旧暦の正月—4月頃は、現在の暦によると2月半ば—6月上旬に相当する。これらの貝類の出土が一括であると仮定すると、これらの重なる季節が“ハレの場”的採食日となり、その日は6月上旬が推察される。一括試料ではなく、時間差をもつ可能性も考えられるが、その場合は、春先と夏季における2度以上の採食および廃棄が想定される。春と夏の時間差が生じている場合、遺構出土の層位と貝種の変化が想定され、廃棄土坑とみられるSK02の形成期間を把握することも可能であろう。

今回は、貝種の旬からその採食時季を試論したが、加賀藩内における他の貝種の確かな漁期も把握できれば、廃棄土坑とみられるSK02の形成時季を更に絞ることも可能であろう。

c. 近代以降—SE04、整地土（0層）—

二枚貝は、イワガキ、マガキ、ヤマトシジミ、コタマガイ、フネガイ科、巻貝ではサザエ、バイが確認できた。これらの資料は、整地土の資料も含まれるため、近代以前のものも混入している。

井戸SE04北側掘方内から出土したマガキは、カキ類採食の時期差を反映している可能性がある。近世まで、カキ類は圧倒的に外洋性のイワガキが主体であるが、近代に入り内湾性のマガキが確認できたことから、それまでとは異なる産地から流通した結果と想定できる。ただし、マガキは、1点のみの出土であり、今後、周辺の近世遺跡の調査事例も合わせて、検討したい。

5. おわりに

近世では建前上、獸肉食が忌避され、動物質食料の主体は、魚貝類となっており、その内容を明らかにすることは食文化史研究の重要な課題の1つである（丸山2013）。だが、全国的にも近世遺跡の発掘調査は、他の時代と比べて多いとは言い難く、その中でも動物遺存体が出土し、報告された事例は少数である。

県内においては、金沢市内に所在する金沢城跡の本丸附段、河北門、堂形、木ノ新保遺跡、宝町遺跡（医学部保健学科地区）の発掘調査で報告がなされている。

金沢城跡河北門復元整備に伴って行われた調査より、検出した遺構内から動物遺存体（魚骨）が出土しており、報告されている（パレオ・ラボ2011）。同じく金沢城の外郭「堂形」の調査においても焼骨片が出土している（高橋ほか2012）。県内の近世遺跡において、多種・多量な動物遺存体を確認した金沢城跡本丸附段の報告（黒澤2008）だが、貝類遺存体はわずかであり、その保存状態が同定に適していない。近世前期以降の城下町である木ノ新保遺跡は、足軽や下級武家屋敷地から、十分な貝類遺存体試料が得られており、今回の報告と比較・検討を要す。

今回報告した資料は、質・量ともに十分で、時代時期も明らかであり、保存状態も良好なことから近世における貝類利用を具体的に示すことができる。特に状態が良好であることから、貝殻成長線や

酸素同位体比の分析を行うことも可能であり、例えばその貝を食した月日（季節）の推定や当時の海水温度の復元などといったより解像度の高い情報が得られると期待される。近年、科学分析と文献資料の比較・検討がなされ、籠祭に食されたハマグリとその遺構が推定されている（畠山ほか 2009）。

今後も、この基礎的資料を基として自然科学分析も視野に、これまで文献資料のみで取り組まれていた近世加賀の食文化について、遺跡出土の動物遺存体から試みたい。

謝辞

本報告は、畠山が行ったニッセイ財団環境問題研究助成若手・奨励研究「貝殻に記録された災害史の復元手法の開発」の成果の一部に、安中が発掘調査成果（遺構・遺物）の状況等を補足し、編集したものである。また、阿部常樹氏、魚水環氏、岡嶋隆司氏、柄木英道氏、納屋内高史氏、丸山真史氏、山川史子氏に有益な御助言を頂いた。

参考文献

- 池田 研 2011 「大阪城下町とその周辺から出土したバイゴマ（独楽）について」『大阪歴史博物館研究紀要』【大阪歴史博物館】：pp.1-17
- 追川吉生 2004 『江戸のミクロコスモス・加賀藩江戸屋敷』【新泉社】：93p.
- 岡嶋隆司 2004 「真鯛頭部の解体法について—解体手順と料理法の推定—」『動物考古学』21号【動物考古学研究会】：pp. 91-101
- 大友信子・川瀬康子・陶 智子・綿抜豊明編 2006 『加賀藩料理人舟木伝内編著集』【桂書房】
- 金沢市史編纂委員会 2003 『金沢市史資料編 10 近世八 生産と生活』
- 金沢大学埋蔵文化財調査センター 2000 「金沢大学宝町遺跡（医学部保健学科地区）」『金沢大学文化財学研究』2：pp.45-50
- 黒澤一男 2008 「金沢城跡本丸附段 2004-1（2003-8）地点の動物遺体の同定」『金沢城跡埋蔵文化財確認調査報告書』 I 【金沢城調査研究所】：pp.253-264
- 陶 智子 2005 「日本海の水産資源と石川の食文化」『日本海の環境と石川の食文化：講演要旨集』【金沢大学】：pp.10-11
- 高橋 敦・松元美由紀・金井慎司 2012 「樹種同定・微細物分析」『金沢城跡 2—堂形（第3・4次調査）—』 [石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター]：pp.148-154
- 畠山智史・富岡直人・遠部 慎・赤松和佳 2009 「瀬戸内海地方遺跡群出土ハマグリの採集活動 - 近世を中心として -」『ANTHROPOLOGICAL SCIENCE』Vol. 117, No. 3 [The Anthropological Society of Nippon] : p. 185.
- パリノ・サーヴェイ 2002 「金沢市木ノ新保遺跡の自然科学分析」『木ノ新保遺跡』【石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター】：pp.513-535
- パレオ・ラボ 2011 「出土した動物遺存体」『金沢城跡—河北門—』 [石川県金沢城調査研究所]：pp.172-174
- 丸山真史 2013 「近世、京都の魚食文化の特徴—近世三都の魚貝類の比較を通じて—」『動物考古学』21号【動物考古学研究会】：pp. 121-135
- 安中哲徳・柄木英道 2002 『金沢市前田氏（長種系）屋敷跡』 [石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター]：132 p.

参考絵図

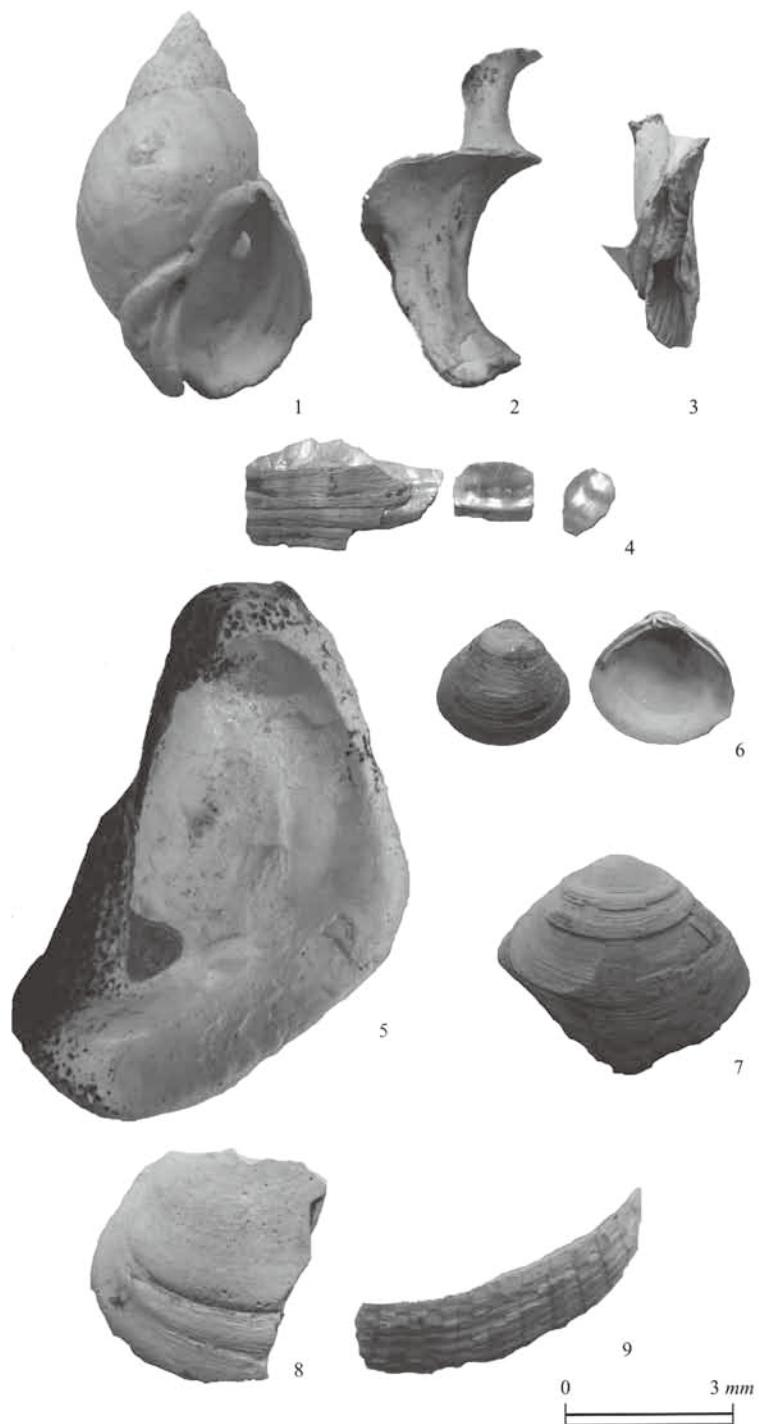
- 1857（安政4）年「前田美作守御上屋敷絵図」（「前田美作守邸図」金沢市立玉川図書館蔵 氏家文庫）

前田氏（長種系）屋敷跡出土の動物遺存体属性表（1）

No.	地区	グリッド	遺構	時代・時期	日付	小分類	部位・部分	左右	備考
1	A	A2	SK30	近世 前葉	960822	サザエ	殻軸	-	
2	A	A2	SK30	近世 前葉	960822	サザエ	殻軸	-	
3	A	A2	SK30	近世 前葉	960822	サザエ	殻軸	-	
4	A	A2	SK30	近世 前葉	960822	サザエ	殻軸	-	
5	A	A2	SK30	近世 前葉	960822	サザエ	殻軸	-	
6	A	A2	SK30	近世 前葉	960822	サザエ	殻軸	-	
7	A	A2	SK30	近世 前葉	960822	サザエ	殻軸	-	
8	A	A2	SK30	近世 前葉	960822	サザエ	殻軸	-	
9	A	A2	SX05	近世 前葉	960826	アカニシ	殻軸	-	写真
10	C		整地土	近代	961018	カキ類	殻頂欠損	R	イワガキ？
11	B	C1	0層 下部	近代	960725	ヤマトシジミ	腹縁一部欠損	R	
12	B	C1	0層 下部	近代	960725	カキ類	殻体破片	?	
13	B	C1	0層 下部	近代	960725	ヤマトシジミ	完形一部欠損	L	11とは別個体 アワジシジミタイプ
14	B	C1	0層 下部	近代	960725	イワガキ	完形一部欠損	R	
15	A	A2	SK27	近世 前葉	960822	サザエ	殻軸	-	
16	A	A2	SK27	近世 前葉	960822	サザエ	殻軸	-	
17	B	D2	0層 下部	近代	960724	コタマガイ	腹縁破片	L?	
18	B	C1	整地土 上部	近代	960931	フネガイ科	腹縁破片	L	貝輪状に破損
19	B	C1	整地土 上部	近代	960931	サザエ	殻軸	-	
20	D		0層	近代	961015	ハマグリ類	殻頂破片	R	チョウセン ハマグリ？
21	B	C2	SK02	前田 屋敷	960903	コタマガイ	腹縁破片	L	
22	B	C2	SK02	前田 屋敷	960903	コタマガイ	後側面欠損	L	オキアサリに似る
23	B	C2	0層 下部	近代	960723	コタマガイ	後側面欠損	L	SH:47.98 mm 季節分析可
24	B	C2	0層 下部	近代	960723	イワガキ	殻頂欠損	L	殻長 15cm 程
25	B	B2	遺構 上面	近代	960725	バイ	前位欠損	-	
26	B	C2	井戸 掘方内	不明	960725	ヤマトシジミ	殻体破片	R	遺構名、未記載
27	B	C2	SE04 北側 掘方内	近代 以降	960806	マガキ	殻頂欠損	L	

前田氏（長種系）屋敷跡出土の動物遺存体属性表（2）

No.	地区	グリッド	遺構	時代・時期	日付	小分類	部位・部分	左右	備考
28	B	C2	SE04 北側掘方内	近代以降	960806	コタマガイ	殻頂欠損	?	
29	B	D2	SK02 東側	前田屋敷	960807	コタマガイ	後位欠損	R	
30	B	D2	SK02 東側	前田屋敷	960807	コタマガイ	後位欠損	R	
31	B	D2	SK02 東側	前田屋敷	960807	コタマガイ	後位欠損	L	
32	B	D2	SK02 東側	前田屋敷	960807	不明	殻体破片	?	イガイ？
33	B	D2	SK02 東側	前田屋敷	960807	フネガイ科	殻体前位破片	L	季節分析可
34	B	D2	SK02 東側	前田屋敷	960807	ヤマトシジミ	殻頂欠損	R	2cm程のサイズ
35	B	D2	SK02 東側	前田屋敷	960807	バイ	完形	-	写真
36	B	D2	SK02 東側	前田屋敷	960807	サザエ	殻軸	-	
37	B	D2	SK02	前田屋敷	960806	アワビ類	殻体破片	-	写真
38	B	D2	SK02	前田屋敷	960806	ハマグリ	殻頂欠損	L	強い障害輪あり 季節分析可、写真
39	B	D2	SK02	前田屋敷	960806	チョウセンハマグリ	完形、腹縁一部欠損	R	
40	B	D2	SK02	前田屋敷	960806	ハマグリ	腹縁欠損	R	
41	B	D2	SK02	前田屋敷	960806	ヤマトシジミ	完形	R	写真
42	B	D2	SK02	前田屋敷	960806	コタマガイ	腹縁破片	R	
43	B	D2	SK02	前田屋敷	960806	コタマガイ	殻頂破片	R	
44	B	D2	SK02	前田屋敷	960806	コタマガイ	殻頂破片	R	
45	B	D2	SK02	前田屋敷	960806	コタマガイ	殻頂破片	R	
46	C		整地土	近代	961018	イワガキ	殻体破片	?	部位不明の破片多数 (登録外)
47	C		整地土	近代	961018	イワガキ	殻体破片	?	部位不明の破片多数 (登録外)
48	C		整地土	近代	961018	イワガキ	殻体破片	?	部位不明の破片多数 (登録外)
49	C		整地土	近代	961018	イワガキ	殻体破片	?	部位不明の破片多数 (登録外)
50	C		整地土	近代	961018	イワガキ	殻体破片	?	部位不明の破片多数 (登録外)
51	C		整地土	近代	961018	イワガキ	殻体破片	?	部位不明の破片多数 (登録外)
52	C		整地土	近代	961018	イワガキ	殻体破片	?	部位不明の破片多数 (登録外)
53	C		整地土	近代	961018	イワガキ	殻体破片	?	部位不明の破片多数 (登録外)
54	A	B1	SE08	近世前葉	960820	ハマグリ類	殻体破片	R	



前田氏（長種系）屋敷跡 出土貝類

- | | | | | |
|----------|---------|--------|---------|--------|
| 1 バイ | 2 サザエ | 3 アカニシ | 4 アワビ類 | 5 イワガキ |
| 6 ヤマトシジミ | 7 コタマガイ | 8 ハマグリ | 9 フネガイ科 | |